慈恵西部医療センターと患者さんをつなぐ情報誌

TOMONI

と も に

2026 AUTUMN

vol.18



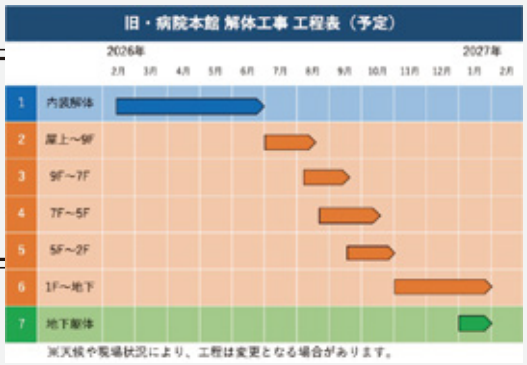
多目的血管撮影装置

人工知能（AI）とロボット技術を搭載しており、手動による細かな位置合わせの負担を減らし、手術をサポートします。

特集

「高度な医療を、もっと身近に」
地域に根ざす脳神経・脳卒中センター

半世紀の歴史に幕
―旧病院解体工事が進んでいます



思い出を刻んだ病棟が、新たな未来へバトンをつなぐ。

2026年2月から始まった旧病院の解体工事は、いよいよ建物本体の解体工程へと進みました。7～9月には上層・中階層（9～5階）部分、10～11月には低階層（4～1階）部分の解体が行われ、2027年1月末には地下躯体も含めて解体が完了する予定です。長年見慣れた病棟の輪郭が少しずつ低くなっていく様子に、寂しさを感じる方も多いのではないでしょうか。

旧病院の9階建て本館病棟は1970年に完成以来、半世紀以上にわたり、多くの患者さんやご家族を迎え、職員一人ひとりが診療や看護、教育、研究に携わってきた場所でもあります。

2026年1月のリニューアル開院により、その役目は新病院へと引き継がれました。旧病院は静かにその使命を終えようとしていますが、ここで培われた歴史や経験、そして地域への想いは、新しい病院へ確かに受け継がれています。

今後も安全を最優先に解体工事を進めてまいります。建物は少しずつその姿を消していきますが、この場所で育まれた歴史や想いが失われることはありません。半世紀以上もの間、地域医療を支え続けた旧病院への感謝を胸に、新たな歴史を刻み始めた新病院とともに、これからも地域に寄り添う医療を歩み続けてまいります。


1F薬剤部付近


1F総合案内、2F初診救急・小児科外来部


8B病棟


8A病棟


8B病棟便所付近


2F産婦人科外来、3F手術部

赤ちゃんとの毎日を、
もっと安心に。

かるがも学級

当院では、当院で出産された生後２～３か月の赤ちゃんとお母さんを対象に、「かるがも学級」を毎月開催しています。「赤ちゃんの発達は順調かな?」「スキンケアはどうしたらいい?」「ワクチンはいつから?」など、退院後の育児では、日々のちょっとした疑問や心配事が出てくるものです。

かるがも学級では、小児科医師、小児科看護師、助産師、小児心理士などの専門スタッフが、赤ちゃんの発達やスキンケア、予防接種など、安心して育児を続けるために知っておきたいことをお話しします。また、育児について気になっていることや困っていることを相談できる時間も設けています。

同じ時期に出産されたお母さん同士で交流できることも、かるがも学級の楽しみの一つ。育児のことはもちろん、日ごろのちょっとした疑問や心配事も、どうぞお気軽にご相談ください。

たくさんの赤ちゃんとお母さんのご参加をお待ちしています。





対象：**当院で出産された生後２～３か月の赤ちゃんとそのお母さん**
日時：**毎月第３金曜日　14：00～15：30**
場所：**ガジュまるホール**
お問い合わせ先：**西部医療センター　産婦人科外来　助産師**

特集

「高度な医療を、もっと身近に」地域に根ざす脳神経・脳卒中センター

脳神経・脳卒中センターの理念

Mission　地域と連携し、脳卒中医療を迅速かつ確実に届け、命とその後の生活を守る
Vision　脳卒中医療を“迷わせない”、地域に根ざしたSCU



脳卒中は時間との勝負。徹底的に迅速性を追求しました

仙石錬平さん
（脳神経内科　診療部長）

「超急性期」の脳疾患に対応

当院では従来から脳疾患の急性期の診療を行ってきましたが、2026年1月の新病院開院を機に「脳神経・脳卒中センター」を開設し、24時間365日対応可能な急性脳卒中診療体制を構築しました。

「脳神経・脳卒中センター」では、超急性期の診療を一つの柱としています。脳卒中は発症のごく初期にどれだけの専門的医療を提供できるかによって、患者さんのその後の状態が大きく左右されます。まさに時間との勝負と言えます。その最初の窓口となる救急診療を担う部署の迅速な対応が不可欠です。

最新の設備と技術で専門的医療を迅速に提供

迅速な治療のために整備したものの一つがストロークケアユニット（SCU）です。脳卒中の急性期の患者さんの集中治療を行う病床で、4床を設置しました。手術室に隣接し、救急搬送から画像診断、血管内治療までがシームレスに実施できる動線設計によって、短時間で治療を行うことができます。

もう一つは、カテーテルによる脳血管内治療の本格的な導入です。これによって治療開始までの時間が短縮され、患者さんへの負担も軽減できるようになりました。

医療機器も最新鋭のものを導入し、これまで以上に質の高い診断・治療が可能になりました。

脳の血流状態を可視化できるCT装置や血管の高精度の画像を低侵襲で撮影することができる多目的血管撮影装置、さらには2025年に国内に導入されたばかりのロボット支援機能付き手術用顕微鏡も導入。開頭手術において、より安全で精密な手術が行えます。


ストロークケアユニット（SCU）

スタッフ間の情報共有のリアルタイム連携ツールを活用

時間のロスなく治療を開始し、進めていくためには、関係する医療スタッフ間の連携も重要です。そこで採用したのが医療関係者間のコミュニケーションアプリ「join」です。本学脳神経外科学講座の高尾洋之准教授らが開発したアプリで、スマートフォンやタブレットでスタッフがCTやMRI画像などの患者さんの情報を瞬時に共有し、遠隔でも診療に関する判断が行えるというものです。当センターでもこれを活用し、治療開始までの時間を大幅に短縮することができました。



脳神経内科と脳神経外科の専門医が常時連携する体制を強化したことも大きな進化の一つに挙げられます。迅速かつ的確な治療判断が可能になるだけでなく、急性期から慢性期に至るまで一貫した診療を提供することができます。

近隣医療機関と連携し、回復期のケア体制を整備

また、医師だけでなく、看護師をはじめ、診療放射線技師などの各分野の専門スタッフも適切に配置し、患者さんの容態が急変したり、治療の判断が求められる場合にも即時に対応できる体制を整えています。

急性期の最適な治療によって、回復された患者さんには、リハビリテーションをはじめとする社会復帰支援を行なっています。当院のリハビリテーション科に加え、地域のリハビリテーションを行う医療機関とも連携し、転院後も切れ目なく回復支援のための医療ケアを受けられる体制を整えています。

医療現場の働き方改革も重視

脳卒中診療は、緊急性が高く、迅速な判断と対応が求められる医療です。特に、長時間にわたる対応や高い集中力が必要となる場面も少なくありません。そのため、医療スタッフが適切な環境で診療にあたることは、より良い医療の提供に重要です。

そこで、医療スタッフの働き方改革の一環として、近隣地域の基幹病院と連携し、脳卒中診療のネットワークづくりに向けて取り組んでいます。



当院は大学病院でありながら、長年、地域密着を理念の1つとして掲げてきました。脳神経・脳卒中センターも、「高度な医療を、もっと身近に」をモットーに、患者さんにとって身近で頼れる病院となれるようスタッフ一同努めてまいります。

専門医による脳血管内治療を本格的に導入

本学は、カテーテルによる脳血管内治療を全国でもいち早く導入していた大学です。当院でも「脳神経・脳卒中センター」の開設を機に、設備を整え、脳血管内治療を行うことができるようになりました。

脳神経外科では脳神経外科専門医が3名在籍。3名ともに指導医の資格を持ち、なおかつそのうちの2名は脳血管内治療指導医の資格も有しています。さらに脳神経内科にも脳血管内治療指導医が1名在籍しており、非常に充実したメンバーで脳血管内治療をはじめとする高度な診療に臨んでいます。


多目的血管撮影装置

脳神経科外科と脳神経内科の協働の強み

当センターの大きな特徴は、脳神経外科と脳神経内科の2科が専門性を生かして密に協働し、患者さん一人ひとりの状態に応じた治療を行っています。さらにリハビリテーション科を加えた3科が一体となった診療体制が、当センターならではの強みです。

3科が連携することで、判断から治療開始までの時間を短縮し、迅速な対応が求められる急性期治療につなげることができます。さらに一人の患者さんをそれぞれの専門的な視点から診ることで、各科の専門性を生かし、補い合いながら、より適した治療を提供できます。

また救急搬送から手術、リハビリまで、多職種が連携してワンチームでできるのも当センターの強みです。今後、さらにチーム力を強化するために、医師以外の職種の専門性を高めることにも力を入れていきたいと思います。

脳血管内治療をサポート　多目的血管撮影装置

多目的血管撮影装置は、血管内に造影剤を注入して血管を画像に映し出し、血栓回収療法などカテーテルによる脳血管内治療を行うことができる機器です。

従来はMRIやCTでの撮影後に治療を行う場合、患者さんを手術室へと移動させる必要がありました。しかし、この装置では撮影から治療までを同じ場所で行うことができるため、患者さんの移動にかかる時間を短縮でき、より早く治療を開始できるようになりました。

今回、新たに導入した装置は、鮮明で精密な画像を短時間で取得でき、患者さんへの放射線への被曝量を低減。医師のカテーテル操作をサポートする機能なども搭載されているため、検査や治療をよりスムーズに進めることが可能になりました。

撮影から治療まで患者さんの体への負担を最小限に抑えながら行えるため、早期の回復に大きな効果をもたらしています。



手術用顕微鏡「KINEVO 900 S」



治療最新鋭の医療機器で患者さんの負担を軽減

人員に加え、最新の医療機器が整い、最先端の治療を行える環境が整備されていることも大きなポイントです。これによって医療者・患者さん双方とも受けるメリットは非常に大きいと感じています。

例えば、新たに導入された多目的血管撮影装置（左ページ下部参照）では、脳梗塞で血管が詰まった際に、カテーテル（細い管）を使って詰まりを取り除く「血栓回収療法」も、よりスムーズに行えるようになりました。

またロボット支援機能付き手術用顕微鏡は、開頭が必要な手術に使う最新鋭の機器で、人工知能を搭載した協働ロボットが、医師の手に代わって手術の顕微鏡操作を行うというものです。医師は顕微鏡をのぞく代わりにモニターに映る映像を見ながら手術をすることができ、人間の手に比べて震えやブレがないため、熟練医と同等の精密で確実性の高い手術が可能になります。



いずれの機器も、治療による患者さんの体の負担を軽減し、さらに治療行為における医療者の負担や治療の時間短縮にもつながっています。

今後も脳神経・脳卒中センターでの実績を積み上げていき、新たな人材や医療機器の導入などにつなげ、脳腫瘍や背骨などの脳疾患診療全体のさらなる質の向上を目指していきたいと考えています。



専門医の充実と最新機器の導入で高度な脳卒中診療が実現

加藤直樹さん
（脳神経外科　診療部長）

脳卒中の患者さんにより質の高いケアを　脳卒中看護認定看護師

当院の「脳神経・脳卒中センター」のストロークケアユニット（SCU）には、現在（※）1名の脳卒中看護認定看護師が配置されています。

脳卒中看護認定看護師とは、脳卒中の専門知識を有し、急性期から回復期まで一貫して患者さんを支援する看護師のこと。医師や理学療法士、栄養士など、さまざまな職種と連携しながら、肺炎や廃用性症候群の予防などのリスク管理、経口摂取の見極めや摂食訓練、リハビリテーションに至るまで、患者さん一人ひとりに最適なサポートを行っています。

脳梗塞は再発率が高いため、退院後の生活も重要です。患者さんご本人とご家族に向けて、食事や運動など、再発予防につながる生活習慣についての指導も行っています。

これらに加え、脳卒中患者さんに関わる院内外の多職種のスタッフとの連携を図ることも重要な役割の1つとなっています。また、今後は医師と連携しながら一定の範囲内で診療も行うことのできる診療看護師の育成にも力を入れていく予定です。現在、脳のカテーテル手術に精通した診療看護師が脳神経外科に1名所属し、医師とともに治療・診療にあたっています。

脳卒中患者さんへのQOL向上に向けて質の高いケア提供に取り組んでまいりたいと思います。

※2026年9月現在


SCUに勤務する脳卒中看護認定看護師、診療看護師、放射線技師のスタッフ。

JHOP CENTRE

ガジュまる教室レポート:
3つの専門職から学ぶ「体・食・生活」

健康推進センター(JHOPセンター)では、健康づくりをテーマに、市民の皆さまを対象とした「ガジュまる教室」を開催しています。「健康を整える3つのチカラ〜体・食・生活〜」をテーマに、「体を整える」では姿勢・動作・筋力について、「食を整える」では栄養・食事のタイミング・水分補給について、「生活を整える」では転倒予防や住環境、生活リズムについて、それぞれ理学療法士、管理栄養士、看護師が健康づくりのポイントを紹介しました。

ここでは、その中でも特に好評だった「体を整える」から、座ったままでもできる「骨盤底筋群のトレーニング」をご紹介します。骨盤底筋群は、尿や便のコントロールなど、日常生活を支える大切な筋肉です。誌面の方法を参考に、毎日のちょっとした時間を利用して実践してみてください。







次回

慈恵ガジュまる教室の「お知らせ」

■日時:2026年11月28日(土)14:00〜15:00
■場所:当院1階　ガジュまるホール
■タイトル:「健康な皮膚をつくる」
〜内側と外側からのトータルケア〜(予定)

ガジュまる教室では、季節に合わせてさまざまなテーマを取り上げています。ぜひご参加ください!

患者さんの声にお答えします!

患者さんから寄せられたご質問やご要望をご紹介し、当院の取り組みについてご説明します。

VOICE 1

外のタクシー乗り場のベンチ位置を変えてほしい。
横断歩道をわたって進むとベンチがあり、通行の障害となっている。

当院の取り組み

ご不便をおかけしておりまして、大変申し訳ございません。以下の画像の通り、ベンチの配置を変更し、車いすの方でも通ることができるようにいたしました。


変更前


変更後

VOICE 2

初めての小児科入院で不安もありましたが、医師や看護師の皆さんが丁寧に診てくださり、安心して過ごすことができました。子どもにも家族にも優しく声をかけてくださり、こちらに入院して 本当に良かったと感じています。

温かいご意見をお寄せいただき、ありがとうございます。小児科で は、お子さんとご家族が安心して 過ごせる医療の提供に、今後も努めてまいります。

お知らせ

2階 はなみずき カウンター前に ゴミ箱を新たに 設置いたしました。



過去の「患者さんの声」はこちら

来院される患者さんは、どなたも何かしらの不安を抱えていらっしゃいます。スタッフ一同、それぞれの専門分野で、できるだけ患者さんの不安が軽くなるよう、努力して参りたいと考えております。



東京慈恵会医科大学西部医療センター
〒201-8601　東京都狛江市 和泉本町4丁目11−1

〈受付時間〉8:00-11:30〈診療時間 〉8:45〜
〈休診日〉日曜・祝日、大学記念日(5/1、10月第2土曜)、年末年始(12/29〜1/3)
上記以外の休診日につきましては当院ホームページをご確認ください。
〈お問い合わせ〉03-3480-1151(大代表)、https://www.jikei.ac.jp/hospital/west-medical-center/

発行:東京慈恵会医科大学西部医療センター広報委員会